



佐川官兵衛の靖国神社合祀について

田中, 悟

(Citation)

佐川官兵衛顕彰会報, 11:1-5

(Issue Date)

2005-08

(Resource Type)

article

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90000594>



佐川官兵衛の靖国神社合祀について

田中 悟*

はじめに

鳥羽伏見の戦に始まる戊辰戦争において、その戦いぶりから「鬼官兵衛」の異名をとり、会津藩家老まで勤めた佐川官兵衛。その佐川が、西南戦争においては豊後口警視隊一番小隊の小隊長として阿蘇南郷谷に赴き、そこで戦死した事実は、すでによく知られている。そして彼の墓所が大分松栄山の護国神社境内にあることも、今となつては周知の事実である。

しかし、その佐川官兵衛が靖国神社の祭神として合祀されていることは、それらの事実に比してあまり知られていないように思われる。現在、靖国神社では祭神名簿の電子化が進んでおり、その照会・調査はたいへん簡単に行なうことができる。

筆者は二〇〇四年一月三日、靖国神社を訪れ、佐川官兵衛の合祀状況について調査を依頼し、その回答を文書で得た。以下、その手続きと回答文書とを紹介するとともに、なぜ佐川官兵衛の靖国神社合祀が他の事実に比べて看過されてきたのかという問題について、若干の考察を加えたい。

I. 調査依頼手続きと回答

二〇〇四年一月三日、大阪からの高速バスで渋谷に降り立った筆者は、東京メトロ半蔵門線で九段下駅を目指した。ここは靖国神社にとって最寄り駅となる。新宿駅からは都営新宿線で、東京駅からであれば隣接する大手町駅から東京メトロ東西線に乗れば、九段下駅まで乗り換えなしで行くことができる。駅を出て、牛が淵の向こうに日本武道館を見ながら九段坂を登れば、右手に靖国神社が見えてくる。なお、九段下から靖国神社とは反対方向にしばらく歩けば、そこは神田の古本屋街である。

第一鳥居をくぐり、大村益次郎像を過ぎて、道路を越えたところに神門がある。その門をくぐった左手にあるのが社務所である。その受付で祭神調査依頼について尋ねたところ、拝殿横の参集所で取り扱っているという。参集所は、老朽化していたものが最近になって新築されており、拝殿の隣でひとときわ目立つ大変きれいな建物である。

* 神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程在籍。

そこで、社務所から拝殿の前を通って参集所に向かい、その入り口にある受付で改めて尋ねたところ、「御祭神調査願」を渡され、必要事項を記入するよう指示された。その内容は、依頼者の住所氏名や祭神との続柄^ハなどに始まり、調査を依頼する人物の氏名・本籍・死歿年月日や死歿場所などわかる範囲の情報、調査結果の通知手段（電話・ファックス・文書）、調査目的、といったものであった。ちなみに、社務所でも参集所でも筆者の問い合わせに應對してくれたのは若い女性であり、その応対はたいへん丁寧なものであった。

筆者は、佐川官兵衛に関してその場で記入できる範囲の情報を記入し、文書での結果通知を選択した。調査目的については「学術研究のため」と書いた。提出した際、結果通知までにかかる日数について尋ねたところ、二週間ほどで通知できるとのことであった。

回答は思ったよりも早く、一二月一〇日に筆者の自宅へ郵送されてきた。B5版一枚からなる回答の全文を以下に掲げる。

靖調第 四二三号

平成十六年十一月十九日^マ

靖国神社社務所

田中 悟 殿

御祭神調査の件（回答）

首標の件、この度御照会の御祭神につきまして、当神社資料に基づき左記の通り回答申し上げます。

記

佐川 官兵衛 命

- 一、 階 級・一 等 大 警 部
- 二、 所 属 部 隊・警視局豊後国警視桧垣一番二小隊長
- 三、 死 歿 年 月 日・明治十年三月十八日（戦死）
- 四、 死 歿 場 所・熊本県阿蘇郡黒川
- 五、 死 歿 時 本 籍 地・福 島 県
- 六、 死 歿 時 御 遺 族 ・ 記 載 無 し
- 七、 合 祀 年 月 日・明治十年十一月十三日

^ハただし、続柄欄があるからといって親族でなければ調査できないというわけではない。筆者はその点を確認の上、続柄欄については空白にして提出した。

右記回答により、佐川官兵衛が靖国神社に合祀されていることは明らかとなった。以下、この回答文書を手がかりにして、若干の考察を加えてみたい。

Ⅱ. 佐川官兵衛の靖国神社合祀をめぐる若干の問題

まず、佐川官兵衛の合祀時期について見ておきたい。靖国神社の回答によれば、その年月日は「明治十年十一月十三日」となっている。これは靖国神社にとって第八回の合祀にあたり、西南戦争関連としては最初にして最大のものである。ここで六五〇五人を合祀したことにより、従来四〇〇〇に満たなかった祭神数は一挙に一万を超えるまでに膨れあがったのである。佐川官兵衛は、その中の一人であった。

ところで、靖国神社が、戊辰戦争における官軍方の戦死者のために創建された東京招魂社に端を発することは、改めて述べるまでもないことだと思われる[□]。その中で、佐川をはじめとした警視隊の面々は、身分としては警察官でありながら、官軍方として戦死したという理由で靖国神社に合祀されている。では、佐川と同様に靖国神社へ合祀されている警察官はどれほどいたのであろうか。『靖国神社誌』（一九一一年、二〇〇二年に再版）に掲載されている「合祀者官職別」の表によれば、西南戦争までの時点で、「一等大警部」から「巡查雇」まで、警察に関係すると思しき官職の合祀者を合計すると、八六六人となる[□]。全体の一分には及ばないが、軍関係の戦死者ではない「維新前後殉難者」が三五八八人を占めるということを考え合わせても、決して無視できるような小さな数字ではない。

しかし、日清・日露戦争を経て、祭神数が一〇万を越えていく過程に目を移すと、新たに警察官として合祀されたと思しき者はわずかに一人である。度重なる対外戦争で、それまでとは桁違いの戦死者が生み出され、こうした戦死者が続々と靖国神社に合祀されるに当たって、警察官の合祀者に占める割合は低下していき、いつの間にかその存在そのものすら忘却されるに至ったものと思われる。そのいっぽうで、警視庁の殉職警察官については、明治

□ ちなみに、東京招魂社が「靖国神社」と改称し、別格官幣社に列せられたのは、明治二二（一八七九）年六月四日のことであるから、佐川官兵衛が合祀された時点ではまだ「東京招魂社」のままである。なお、東京招魂社と靖国神社との関係については、阪本是丸「靖国神社の創建と招魂社の整備」（『国家神道形成過程の研究』岩波書店、一九九四、所収）など参照。

□ このうち四名は朝鮮での死者であるが、残りは西南戦争での戦死者である。なお、その他に軍職と警官職とを兼任していた者が若干いる。

一八（一八八五）年に創建された弥生神社（第二次世界大戦後は弥生廟と改称）に合祀されることになっていた。だが、西南戦争の戦死者については、靖国神社・護国神社に合祀されていることを理由にして除外されている^四。こうした記憶の狭間の中で、佐川をはじめとする警視隊戦死者は、長いあいだ忘却の淵に沈むことになったのである。

次に、佐川官兵衛の故郷である会津と靖国神社との関係に目を向けてみたい。すでに述べたように、靖国神社の前身たる東京招魂社は、戊辰戦争の官軍方戦死者を慰霊顕彰するために創建された。この「官賊史観」は靖国神社の祭神に関する限り、現在でも変わることはない。戊辰戦争における東軍や西南戦争における薩軍、いわゆる「賊軍」とされる側の戦死者は、今でも合祀されぬままである^四。

こうした歴史的文脈を踏まえて、改めて佐川官兵衛の靖国神社合祀のことを考えてみれば、何が見えてくるだろうか。何よりも明らかなのは、「会津の猛将・鬼官兵衛」と「靖国の御祭神・佐川官兵衛命」との齟齬である。佐川とともに戊辰戦争を戦い、死んでいった者は、阿弥陀寺や長命寺をはじめとした会津の各所において、靖国神社の体系の外で、祀られている。「靖国」という近代ナショナリズムの体系の中で必然的に求められる「外部」として、中央の政権から彼らは意識的に排除・忘却されたのである。

いっぽう、「賊軍」とされた旧会津藩に連なる人々は、こうした事態にどのように対応していったのであろうか。この点は現在筆者が取り組んでいるテーマにかかわってくるのであるが、大胆に単純化して図式的に示せば、白虎隊に代表される「忠節・武士道」をリリースに、「忠節」の対象を換骨奪胎することによって「我らこそが真の尊皇であり、日本精神の体現者である」という立場をとり、近代日本という天皇主義国民国家の中心に自らを位置づけたのである。第二次世界大戦の敗戦に至るまでの長期間にわたって、主君の節に殉じるといふ本来的な「武士道」の文脈が捨象され、天皇への忠節へと読み替えられた。一九四〇年代に至っては「会津に学べ」という機運すら盛り上がるのである^四。

^四 塩谷七重郎「警視庁と会津藩士」『会津史談』第五八号、一九八四）六六・六七頁。塩谷氏によれば、この弥生廟には会津藩士が四名合祀されているという。

^四 会津藩と靖国神社とのかかわりについては、小林榮三「靖国神社と会津藩について」（『歴史春秋』第五四号、二〇〇二）、佐藤一男「靖国神社に祀られない東軍の兵士たち」（『歴史春秋』第五八号、二〇〇二）など参照。

^四 後藤康二「白虎隊テキストについての覚書1」（『会津大学文化研究センター研究年報』第八号、二〇〇二）、同「白虎隊テキストについての覚書2」（『会津大学文化研究センター研究年報』第九号、二〇〇三）、中村とし「白虎隊と十五年戦争」（『民衆史研究』第九号、一九八五）など参照。

こうした文脈の中で、佐川官兵衛はどう位置づけられるであろうか。結論から言えば、非常に難しい立場に置かれることになる。すなわち、会津藩士としての忠節を尽くすべき戊辰戦争では生き残り、その惨憺たる苦難の記憶もいまだ鮮やかな中で、官軍方として無名の戦死を遂げた佐川官兵衛は、戊辰戦争でのあまりに有名な功名のゆえに、戊辰戦争後の会津で行なわれたような「死の読み替え」が困難なのである。これが白虎隊であれば、主君への忠義で完結した物語を天皇への忠誠の物語に読み替えることはたやすい。松平容保から天皇へという「首のすげ替え」だけで済むからである。また無名の人間であれば、戊辰戦争での行状を不問に付し、西南戦争における死に様だけを扱えばよい。そして天皇主義国民国家の中心に堂々と座ればよい。戊辰戦争終結後に本格的な人生の歩みを始めた者やそれ以降の世代ならば、なおさら言うまでもない。けれども佐川官兵衛にあつては、そうはいかないのである。会津藩の猛将にして家老という経歴の「影」を背負いつつ、明治国家の警視隊一等大警部として戦死するのである。高名高位の会津藩士の中で、阿弥陀寺と靖国神社とに同時に祀られているのは佐川だけである。この両者は本来的に両立しない。この矛盾の中で、優先されたのは前者であった。佐川においては、戊辰戦争での戦いぶりが前面に押し出され、西南戦争での死に様は、否定はされないまでも後景へと退けられたのである。

おわりに

靖国神社合祀の話に始まって最後はいささか脱線気味となったが、佐川官兵衛と靖国神社との関係がはらむ微妙な問題の一端については、いちおう触れることができたように思う。右で若干示唆的に述べたように、第二次世界大戦前ではなく、戦後になってはじめて佐川官兵衛顕彰への機運が盛り上がったのにはそれなりの理由がある、と筆者は考えている。その議論の全体を提示する用意は現時点ではまだないが、いずれ順を追って議論していきたいと考えている。

追記

靖国神社には、遊就館という名の戦争博物館が付設されている。この博物館は、靖国神社の歴史観・戦争観をいろいろな意味において明らかにしてくれているので、靖国神社を訪れる際には必見の場所である。日本の武の歴史から始まって明治維新に至り、日露戦争で絶頂に到達するその展示は、それ以降徐々に陰鬱さを増していき、数え切れぬ遺影を掲げて無言

のうちに幕を閉じる。

「靖国の神々」と題したその遺影群の中に、佐川官兵衛の遺影を見つけた。正確には肖像画である。この場所に掲げられている写真群は、遺族の提供によって集められたものであるから、この肖像画も誰かが靖国神社に提供したものと思われる。詳しい経緯をご存知の方がおられればご教示願いたい。

その他、遊就館に隣接する靖国会館に設けられている靖国偕行文庫は、軍事史・神道関係を中心とした貴重な文献を多数所蔵する閉架式の図書館である。一般人も気軽に利用できる。

また、靖国神社から程近い北の丸公園には、本文でも言及した弥生廟がある。靖国神社からは入り口近くの陸橋を越えて北の丸公園に入り、田安門と日本武道館との間にある細い道を登れば、弥生廟のある田安門の土手上に出る。北の丸公園からは千鳥ヶ淵を挟んだところに位置する千鳥ヶ淵戦没者墓苑とともに、ぜひ靖国神社と併せて訪れたい場所である。